

氏名 三宅 啓 文

学 位 の 種 類 医 学 博 士

学 位 授 与 番 号 博 乙 第 2281 号

学 位 授 与 の 日 付 平 成 3 年 6 月 30 日

学 位 授 与 の 要 件 博士の学位論文提出者（学位規則第5条第2項該当）

学 位 論 文 題 目 慢性膵炎の経過と予後に関する研究

第1編 診断時の状態と膵管像、膵外分泌機能、耐糖能の経時的変化について

第2編 疼痛経過、生活の質の変化および治療法について

第3編 合併症、予後および予後決定因子について

論 文 審 査 委 員 教授 辻 孝夫 教授 太田善介 教授 原田英雄

学 位 論 文 内 容 の 要 旨

慢性膵炎の経過と予後を研究する目的で、慢性膵炎1群と診断され1年以上の経過観察がなされた170例を対象とし、第1編にて診断時の膵障害程度とその経時的変化を、第2編にて疼痛経過、生活の質の変化、治療法を、第3編にて合併症、予後および予後決定因子を検討した。有痛例はアルコール性と胆石性に多く、アルコール性膵炎はその診断時年齢が非アルコール性よりも若年齢であり、診断時の膵障害程度もより高度であった。膵管像と膵外分泌機能の経時的観察では改善例を認めたが、内分泌機能は増悪例のみであった。経過観察中に疼痛の軽減または消失を104例に認め、疼痛の緩和率を左右する因子は成因、経過観察期間、飲酒状態であった。経過中に生活の質の低下を56例に認めた。内視鏡的protein plug除去術は疼痛の緩和に有効であった。手術が54例に施行され、手術例の疼痛緩和率は80%であった。経過中に膵嚢胞、総胆管狭窄、消化性潰瘍、肝障害などの合併症を認めた。診断後に39例が死亡し、その主たる死因は悪性腫瘍、頓死、肺炎などであった。慢性膵炎の死亡率および癌死亡率は本邦の一般人と比較すると有意に高値であった。慢性膵炎の予後と有意な関連を持つ因子は、成因、喫煙、飲酒、糖尿病、年齢などであった。

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

本研究は、慢性膵炎の経過と予後を研究する目的で、慢性膵炎と診断された107例を対象に、診断時の膵障害程度や疼痛経過、生活の質の変化、さらには合併症などの予後決定因子の調査をしたものである。その結果、39例が死亡していたが、その主たる死因は必ず

しも膀胱発癌ではない他の悪性腫瘍や頓死などが多いとの興味ある知見を得ている。
よって、本研究者は医学博士の学位を得る資格があると認める。